http://alce.jp/journal/ 第 17 巻（2019）pp. 339 - 359 ISSN：2188-9600

Studies of Language and Cultural Education SLCE 言語文化教育研究 発行・編集 言語文化教育研究学会 ALCE Association for Language and Cultural Education

論文

ハーフとひきこもりの部分的つながり

複言語・複文化性の原点回帰と「移動」概念の再定義

藤谷　悠 *

（慶應義塾大学大学院）

概要

東浩紀の『ゲンロン0――観光客の哲学』(2017) によると，現代の世界は，ナショナリズムとグローバリズムなど，様々な局面で二項対立的な「二層構造」になっているという。本研究は，国際性という文脈のみに単線化された結果，「二層構造」を生み出す要因となっている複言語・複文化の物語を，「本来の姿」へと回帰させることを目指している。単線化した複言語・複文化の物語の例として，「移動する子ども」研究を批判対象とし，同研究が暗示する「移動する子ども」と「移動しない子ども」の二項対立的構造を概観しながら，その間に中間的文脈を作り出すことを試みる。そうすることで，同研究における「移動」概念を拡張的に再定義する。これらの目的に向けたナラティブな調査として，日仏「ハーフ」の人々を対象としてライフストーリー調査を行なった。それに加え，筆者自身の「ひきこもり」経験をオートエスノグラフィーとして記述し，それをハーフたちの語りと交差させる。そうして，「ハーフ＝移動する子ども」と「ひきこもり＝移動しない子ども」との間に「部分的つながり」を見立てることで，複言語・複文化の物語を複線的な「本来の姿」へと蘇らせるのである。

Copyright © 2019 by Association for Language and Cultural Education

キーワード　移動する子ども，アイデンティティ，当事者研究，ライフストーリー，オートエスノグラフィー

1. 研究背景

1. 1. 高まる反グローバリズム

近年，イギリスにおけるBrexit，アメリカの大統領選挙におけるドナルド・トランプの勝利，フランスにおける極右政党・「国民連合（RN）」の台頭など，世界各地でグローバリズムへの反動的な傾向が強まっている。トッド（2016）は，そうした現状の背景に，グローバル化に対する疲弊感情，すなわち「グローバリゼーション・ファティーグ」があると考察している。国境の概念が薄らぎ，世界全体がつながるような現代においては，かつての時代のように，単に国民であるというだけでは生まれ育った国で生存していく保証は与えられず，世界で通用する「グローバル人材」としての資質を身に付けることが求められる。グローバリゼーション・ファティーグとは，そうした国際的な競争の中で，生存のため

* *E-mail:* fujitani@sfc.keio.ac.jp

のハードルが高まっていることに対する疲弊なのである。特にその疲弊を被っているのは，グローバリズムの激流の中で「無視されてきた人々」である。

このような時代背景の中，「反動」が起きる以前のグローバル社会では，その象徴として理想化されていたような人々に対しても，「ヘイト」の矛先が向けられている。例えば，2015年ミス・ユニバース日本代表，および2016年ミス・ワールド日本代表は，それぞれ共にハーフが代表に選ばれたが，彼女らに対して，主にインターネット上で，「日本人じゃない」という趣旨の「ヘイト・スピーチ」が行われた（浅倉，2017）。

世界各地で起きているこれらの「反動」を視野に入れながら，それでも分断的なナショナリズムへと閉じていくのではない道を探るのならば，グローバリズムを，人々に「疲弊」を感じさせるような現行の形ではないものへと軌道修正する必要があると筆者は考える。この課題に対して，本研究は，複言語・複文化主義の観点からアプローチする。

1. 2. 矛盾を惹起する複言語・複文化能力観：その「本来の姿」

牲川（2013）は，『ヨーロッパ共通言語参照枠』（Council of Europe，2001：通称『CEFR』）内の複言語・複文化能力の記述，およびその元となったコスト，ムーア，ザラト（1997/2011）による研究を踏まえながら，現在において「複言語・複文化能力の保持者がどのように想定されているか」を概説し，その想定が複言語・複文化主義の重要な目標としての「多様性の平等かつ寛容な受容という価値の育成」に矛盾する結果を惹起していることを指摘する（牲川，2013，p. 134）。コストらは，以下のように述べている。

> 単一言語単一文化と言われる共同体の内部にも，社会経済，世代，職業，学歴等様々な次元の多様性や集合があって，社会化の初期にそこから来る言葉文化の複数性に出会うのは不可避である。ふつうの意味での複言語・複文化とは違うけれど，言葉と文化の実践の差に関する社会イメージを生成しないとは言えない。付け加えるなら，外との接触と，内部の差異化のため，初めての経験が全体的に行われていたとしても，子ども達の出身文脈や経歴が違えばそれは同じ性格を持たないということだ。移民者の子どもや国際結婚で両親の言語が違う子どものことを言っているのではない。社会経済的社会文化的に見て比較的均質な環境の村の子どもも，テレビを見るし，都会や外国から来る旅行者，観光客に出会う。都会の子どもは，周りにいろいろな外国人もいて外国文化外国語に日常的に触れている。複言語・複文化使用経験は，非常に小さいうちから多様化しており，異言語，その多様性，異文化共同体，その実践との接触形態，度合いの不均質は，避けることができないということだ。（コスト，ほか，1997/2011，p. 255）

つまりコストらは，「あらゆる子どもにとって，社会化過程で複言語・複文化を経験し接触することは「ありふれた」ことだと強調」（牲川，2013，p. 138）しているのである。牲川はさらに，『CEFR』の記述を参照しながら，「複言語・複文化の経験や接触は外国に移動することや，外国につながりをもつ家庭環境であるといった者に限定された特殊なものではく，誰にとってももちうるものであると言える」（p. 139）ことを指摘する。

要するに，本来の定義における複言語・複文化能力，あるいは複言語・複文化性の概念は，万人に適用可能な普遍的な概念である。だが，言語文化教育研究の領域における特定の研究群においては，国際性の文脈を強調して取り扱う一方で，その他の文脈や対象をあまり取り上げない傾向があり，本研究ではそうした偏りを批判対象としている。

表1. 調査対象者たちのプロフィール

氏名（仮名）	性別	家族構成	家庭での使用言語	来歴
野澤ダン	男性	父（フランス人），母（日本人），姉	父はフランス語，母は日本語。	フランス生まれ日本育ち。
ヴィアット凛	女性	父（フランス人），母（日本人）	父母ともに日本語。	日本生まれ日本育ち。
塩田ニコル	女性	父（フランス人），母（日本人），妹	父はフランス語，母は日本語。	アメリカ生まれ日本育ち。
ルロワ剛	男性	父（フランス人），母（日本人），姉	父はフランス語，母は日本語。	日本生まれ日本育ち。
堀ジャメル	男性	父（フランス人），母（日本人）	父母ともに日本語。	日本生まれ日本育ち。

1. 3.「移動する子ども」研究の光と影

川上郁雄らによって行われている「移動する子ども」研究は,「幼少期に複数言語を使用する環境で成長した子ども」を調査対象としている。同研究内において,「移動する子ども」とは,「空間を移動する」,「言語間を移動する」,「言語教育カテゴリー間を移動する」という3つの条件を持つ分析概念であり，ここで言うところの言語教育カテゴリーとは「母語教育，外国語教育，継承語教育等，子どもの言語教育や言語学習を表すために大人が作った既成のカテゴリー」とされ，これらの既成の境界を越えて子どもたちが「移動」するという動態的な含意が含まれている概念である（川上，2010，p. 3）。

「移動する子ども」研究は，旧来の単一的なナショナリティ観の中でマイノリティとして押し込められる人々を，国際性の文脈からエンパワーメントしてきた。1. 1. で述べたようなグローバリズムへの反動に伴い，今再び「移動する子ども」が差別の対象へと引き戻されかねない状況にある中で，これからもその役割は重要なものとなるだろう。

だが他方で，そうして「移動する子ども」に「光」を当てる過程の中で，たとえ研究者たちが意図せぬものであったとしても,「影」を作り出してしまっているという側面にも目を向ける必要があるのではないかと筆者は考える。それは言わば,「移動する子ども」を（複言語・複文化能力を）「持つ者」として物語を描く場合に，暗黙的に「持たざる者」として対比される「移動しない子ども」のような人々への視座である。「移動」という概念を現状のように国際性に基づいた意味内容のみに限定すると，例えば，生まれた国の中で生きる術しか持ち得ないがためにグローバリゼーション・ファティーグに苦しむ存在や，自宅や自分の部屋に留まっている存在としてのひきこもりの人々が,「移動」をしない存在として想起されてしまう。それが要因となり，グローバリズムの時代における「人材」としての適正や能力の欠如を印象づけられ，彼らが社会から治療や矯正，改善の必要がある存在として見なされてしまう可能性を，無視してはいけない。

2. 調査対象者と調査方法

2. 1. ハーフとひきこもり：「移動する子ども」と「移動しない子ども」

本研究の調査対象は，いわゆる日仏ハーフの学生と，長期間のひきこもり経験を持つ筆者自身である。この二者は，国際性の文脈のみを強調する現行の「移動する子ども」研究における「移動する子ども」と「移動しない子ども」の対象に，それぞれが該当する。

2. 1. 1. ハーフの人々のプロフィールと調査の概要

本研究における5名のハーフの調査対象者は，全員，インタビュー当時は大学生，もしくは大学院生である。その他のプロフィールの概略（氏名，性別，家族構成，家庭での使用言語，来歴）は，表1の通りである。本研究で用いる調査対象者の氏名はすべて著者が設定した仮名であり，来歴や固有名などの個人を特定しうる情報に関しては，語りの主要な内容に影響が出ないことを確認しながら変更を加えてい

る。なお,「ハーフ」という名称については，それ自体がある種の差別性を持つという岡村（2016）が指摘するような問題を踏まえつつも，対象者本人たちが同名称に対して抵抗がないことを確認した上で，一般に広く通じる名称であることを考慮し，本研究ではこの名称を用いている。

2. 1. 2. 筆者がひきこもりになるまでのプロフィール

筆者は，日本で生まれ，日本で生活をしながら，日本人の両親に育てられた。家族として，両親の他には兄がいる。兄も日本で生まれ育った。両親もまた共に日本で生まれ育った。教育熱心な両親だった。「良い学校に入れば，良い会社に入れて，良い生活ができる」というのが教育方針だった。こうした家庭は，日本の社会の中では特別ではなく，ごくありふれた「普通」の家庭であろう。筆者は,「普通」な環境の中で育った。

両親の教育方針に基づき，筆者は小学校と中学校の受験をするが，どちらも合格することができなかった。小学校受験は抽選に外れ，中学校受験は受験勉強を途中で挫折した。結果として，都内の区立小学校に行き，区立中学校に進んだ。その後の当然の流れとして，中学生となった筆者は，高校受験に照準を合わせ，学習塾で勉強に励んでいた。

その当時，中学校に進んだ頃から，それまでもくすぶっていた家庭内の不和は，深刻なものとなっていた。主に母がその不和の犠牲となっていたが，父や兄は当時の筆者に比べて体躯に優っており，筆者は家庭内の惨状を目の当たりにしつつも，関わり合いになることを避けていた。中学校での生活は楽しかったが，家に戻ると暗澹たる気分に包まれていた。家族の会話はほとんどなかった。その代わりに，いつも誰かの怒声が響く家だった。

中学2年生の夏休み，筆者は再び受験勉強を放棄する。学習塾の夏期講習に通うことを拒否した。両親は落胆したり，時に激怒したりしたが，結局筆者が学習塾に復帰することはなかった。その後，別の小さな塾に通うが，これも長続きしなかった。

本来であれば高校受験に向けて追い込みをかけていたであろう中学3年生の夏休みを迎える前に，筆者は中学校への登校を拒否するようになった。その頃，いつも家を出るときに入れていた「スイッチ」がうまく入らなくなり，学校に行っても暗い気分のままだった記憶がある。この不登校は長期化し，そのまま筆者はひきこもりになる。

2. 2. 調査法の組み合わせとその方法論

本研究の研究方法は，2つのナラティブな質的調査法を組み合わせて用いている。一つはハーフの対象者たちに対するライフストーリー調査，もう一つはひきこもりの当事者であった筆者自身によるオートエスノグラフィーである。

本研究の生活史調査は，桜井，石川（2015）など，対話的構築主義とそれに対する批判的立場を概観した上で，岸（2015）が示した「語り手の否定でも，構造の否定でも，あるいは事実性の否定でもない,「第四の道」」としての,「事実性への回路を残したまま，理論の側に変更を加える」という立場に立脚している（岸, 2015, p. 206）。この立場を採ることで，語りの中のすべての事象を，単に個別性の問題へと収束させるのでなく，それを社会全体に波及するような普遍性を帯びたテーマに連なる問題として取り扱うことが可能になると考えるからである。「第四の道」に基づいた調査・記述のプロセスの中で，ステレオタイプなハーフ観やひきこもり観，あるいは「移動する（しない）子ども」のようなカテゴライズに基づいた文脈の単純化を脱構築しながら，複言語・複文化性と「移動」の文脈を中間的なものへと改め，普遍的に語りうる物語を展開する。

2. 2. 1. ライフストーリー調査の形式・概要

すべての調査対象者は調査開始以前からフランス語の授業や所属組織での活動を共にするなど，筆者との交友関係があったため，十分にラポールが構築

されていた。そのため，事前準備としてのラポール構築の段階は踏まず，当初から本題であるライフストーリーに関する半構造化インタビューを行なった。調査依頼の際には，口頭にて，ライフストーリー調査であること，アイデンティティの変遷について話してほしいということ[1]，インタビュー内容を録音して記録すること，データを用いて論文として記述すること，調査で得たデータを論文執筆の用途以外には使用しないことを各対象者に事前通達した上で，すべてに了承を得た。インタビューは，各対象者に対して2～3時間程度の聞き取りを一度行い，その上で，他の対象者と比較して聞き漏らした点やその他必要があった場合には，随時追加調査を実施した。インタビュー時の録音は，iPhoneのボイスメモ機能を用いた。インタビュー後にその録音データを，筆者自らの手で，聞き取れる限りのすべての音声を逐語的にトランスクリプションした。書き起こしたすべてのインタビューデータは，常時参照可能なものとして，Microsoft Wordファイルの形式で保存している。

2. 2. 2. オートエスノグラフィーの位置づけ

オートエスノグラフィーは，井本（2013）によると，「社会科学に「感情」や「人間性」を吹き込む表現形式の実験」として展開されるものである。その特徴として，「調査者が自分自身を研究対象とし，自分の主観的な経験を表現しながら，それを自己再帰的に考察する手法」(p. 104）といった点が挙げられる。一方で，「自己中心的でナルシスティックな行為」(p. 109）という批判もあるが，「障害や病いの当事者研究などの部類に入」(p. 109）ることで，意義は正当化されるという。この点について，オートエスノグラフィーという用語の創始者とされるHayano（1979）は，研究者が「当事者」である点で完全なインサイダーであり，自分が属する集団との親密な関係性や，研究対象となるその集団での完全な成員性を保持していることの意義を強調する。また，小児アレルギー性喘息の当事者としての自伝的記述を行った岡原（1995）は，「私の生きた経験があなたの生きた経験とどこかで接点を持ちえること，それに私は賭けている」(p. 66）と述べる。このように，多くのオートエスノグラフィーは，ある社会や文化に対する理解を深めることを図りながら，読者との間に共感を創出することを目指している（井本，2013）。

本研究において筆者がオートエスノグラフィーを用いることには，筆者がひきこもりの当事者であったという点において，正当な意義があると考える。斎藤（1998）は，ひきこもりの問題を，社会・家族・個人のそれぞれの接点が失われた状態としての「ひきこもりシステム」という観点から捉えつつ，ひきこもり当事者たちの内的な状態を知ることによって，家族や社会の人々のひきこもりに対する理解が深まると説いている[2]。

オートエスノグラフィー実践者の一人であるDenzin（2006）は，「歴史の中に自分を書き込む」(p. 426）こと，さらにそれによって「歴史」を変えることを志向し，オートエスノグラフィーを実践した。この意志を筆者は受け継いでいる。しかし，この目的における「歴史」は，他者と共有可能なものでなくてはならないと考える。だからこそ，他者同士であるハーフとひきこもりが共に参照可能な「歴史」を作る必要がある。

1　対話的構築主義の立場では，事前に調査内容を対象者に伝えることは望ましくないとされるが，本研究では岸の「第四の道」の立場から，個人の語りと普遍的な社会課題とを接続して論じる目的があるため，「ハーフ」や「移動する子ども」という社会課題を包括するキーワードとしての「アイデンティティ（の変遷）」という点についてのみ，事前に意識の共有を行なった。

2　斎藤のような精神医療や，「同化主義に抗する者」としてひきこもりを描く関水（2016）など社会学の領域で，これまでもひきこもりを対象とした研究は行われてきたが，当事者自身がその経験を対象とした例は少ない。また本研究は，ひきこもりの複言語・複文化性に着目することで，これまで彼らとの関連が見出しづらかった言語・文化の領域へと結びつけた点で新しい。

2. 2. 3.「部分的つながり」と「相互包摂的関係」

人類学者のストラザーン（2004/2015）もまた「二項対立の克服」を志向しているが，そのためにこれまでの人々が用いてきた「一体性の観念」は，「壊そうとしているはずの基盤にある二元論をどうしても永続させて」きたことを指摘する（p. 130）。ストラザーンは，「全体となるもの」と「（その）部分となるもの」との間にある一方向的なヒエラルキー関係を，「お互いを部分として持つ関係」へと更新することでそれを乗り越えようとする。ストラザーンの理論は，例えば「一」と「二」の関係について，「一は二に包含されるもの」という固定された捉え方から，「一は二倍にされた一である二を包含したもので，二は二の半分である一を分割したものである」（p. 216）という双方向に往還する視点に基づいた流動的なものへ変えていく。「非・ホーリズム的転回」を志向する哲学者の清水（2017）は，この「部分的つながり」の理論を概観しつつ，「《どちらをどちらの部分として見るか》というパースペクティヴの，相互的な切り替え」をすることで，「ある部分と他の部分はそれぞれに相互包摂的になる」と論じる（p. 135）。

1. 3. で示したように，現行の「移動する子ども」研究には，国際性の文脈のみで「持つ者」と「持たざる者」を切り分ける構図があり，本研究の対象者であるハーフとひきこもりの間にもその分断が存在すると考えられる。本研究は，一方向的に固定されているこの関係性に，ひきこもりの側を「持つ者」として位置づける視点を交えることで，国際性の視点とその新たな視点とが切り替わるたびに，包摂する側とされる側の立場が入れ替わるような関係，すなわち「相互包摂的関係」を構築することを試みている。

清水はさらに，「特定の部分としての諸文化から切り離された媒体」としてのこれまでのフィールドワーカーや調査者といった存在が，「彼自身を諸文化とはまったく異質なものとして定立し，諸文化を断片化してゆく唯一の主体」（pp. 138 - 139）であったことを指摘しつつ，ストラザーンの理論の中に，「諸文化がお互いに部分的なものとしてつながっていく媒体そのものを，このような「唯一の主体」として捉えない，という方法論」（p. 139）を見出している。本研究で，調査者としての筆者が，オートエスノグラフィーという手法を用いて自分自身の一部を切り出し，それを「部分」として調査の枠組みの中に組み込むことの意義は，（清水が見出した）このストラザーンの方法論に依拠している。つまり本研究では，ハーフとひきこもりの関係のみならず，調査者と対象者の関係もまた，相互包摂的なものへと転回される。この関係の中では，調査者たる筆者は十全的な意味での「唯一の主体」性を失い，自らも調査対象としての性質を同時に帯びることになる。

この方法論は，岸（2015）がライフストーリー研究における問題点として指摘する「他者への配慮の問題」，すなわち調査対象者への「カテゴリー化の暴力」という問題をケアするためのアイデアとして提案するものでもある[3]。これまでに多くの質的研究において，調査で得たナラティブをまとめ上げる「唯一の主体」として調査者が行使してきた，対象者への一方向的な権威性は解体され，二者は相互包摂的関係となる。この関係の中では，もし研究の過程で対象者に何らかの「暴力」作用が起こるとしても，それは別のかたちで調査者の側にも作用することとなる。あるいは逆に，特定の誰かにとってのみ利する物語を描く（それは結果として「影」を生む）のではなく，研究の枠組みに組み込まれたすべての対象にとって互恵的な結論を導くための指針が含み込まれている。

3　本研究では，調査者を調査対象者として研究の枠組みに組み込むという段階のみに留まっているが，それに加え，調査対象者の人々を共同の調査者として位置づけ，彼らと共に相互的に語りの考察や分析を行うことができれば，このアイデアはより有意義なものになると考えられる。

2. 2. 4. 分析手法

インタビューデータの分析にあたってはナラティブ分析の形式を用いている。Fisher（1985）によると，「テキストを批判的に読み込むこと以外にナラティブの分析に確たる方法はない」（灘光，浅井，小柳，2014，p. 74）とされているが，Riessman（2008）は具体的なナラティブ分析の方法として，テーマ分析・構造分析・対話分析という3つのアプローチを紹介している（灘光，ほか，2014）。

本研究は，この3つのうち，テーマ分析に当てはまるアプローチを行なっている。テーマ分析は，「個別事例にみられる主観的意味の世界を理解することを目的とし，それに関わるカテゴリーを（筋の読み込みから展開してくるテーマ）抽出する」（灘光，ほか，2014，p. 74）ことを目指す。本研究では，対象者たちのライフストーリーと，筆者のオートエスノグラフィーのデータを，筆者（自身）がそれぞれの語りの筋に着目して批判的な読み込みを行なった結果，両者の文脈が交差する5つのテーマが展開された。さらに，各個の語りを重層的な物語として再構成する中で，差異を強調する視点でしか語られてこなかった他者同士が持つ共通性や，中間的な文脈を考察するための「要素」を浮かび上がらせ，複言語・複文化観と「移動」の概念を徐々に変容させることを目指す。

3. 調査結果：5つの物語

調査結果として，テーマ分析を用いて抽出した5つのテーマに基づき，5つの物語を示す。それらの物語を読み解いて，研究課題としての，複言語・複文化性の原点回帰，および「移動」概念の再定義に向けた，「考察の要素」を導き出す。5つの物語のそれぞれのテーマは，すべて「移動」に関連するものを抽出した。全体の形式として，まずテーマに沿った対象者のライフストーリーと筆者のオートエスノグラフィーを交互に記述する。その後に両者を随時総合し，結論に向かうための具体的な足がかりとしての「考察の要素」を抽出する。その「要素」が，固着した既存の文脈や概念を，徐々にずらしていく。

3. 1. 物語1：欠損，収束，減退という「移動」

3. 1. 1. 野澤ダンのライフストーリー

ダンは，幼稚園から高校まで，東京国際フランス学園（通称「リセ」）で育った。リセには，ダンと同じ日仏ハーフの子どもが多く，彼らとの生活の中で，自分がハーフであることに強いアイデンティティを抱くようになったという。特に，リセの外部の日本的・フランス的な集団や社会での体験と比較することで，その意識は強まったと語る。

ダン（以下，「D」）：学校の外でサッカークラブに所属していたんですけど，そこに行くと外人として見られるんですよ。だけど，フランス行くと「日本人だ」みたいな。とか，アジア人みたいな感じになるんで。だから，ハーフであったとしても，なんかその，「外国人だね」みたいな風に捉えられることが多かったんで。多分それで，自分はなんか……ハーフの人たちと一緒にいると，「あ，一緒だね，ハーフだね」みたいな感じになるんで。それで多分ハーフなのかな。その，自分はハーフだなみたいな感じに思ったんで。

リセに所属している間は，彼自身が語るようにハーフへのアイデンティティが強かった。しかし，リセの卒業後の約半年間，大学に入るまでの浪人期間中に通った学習塾での生活を通じて，徐々に意識が変容していく。

D：周りの人たちの振る舞いとか，その，塾っていう建物に入ると，なんか目に入るんで。日本だなっていう感覚がありました。多分だんだんその，塾だけの環境になって，だんだん日本的な環境に適応してって。

ダンは，「日本だなっていう感覚」がある学習塾で日々の生活をする中で，徐々にその環境に適応して

いったと自己分析している。その後，大学合格が決まった後に入学する前まで働いていた日本人ばかりのバイト先での生活は，以下のように語っている。

D：「あー日本だー」みたいな感じは……その時は感じなかったですね。多分，塾の期間でなんか慣れて，多分なんか，全然違和感とかそういうのを感じなくて。「日本だー」って感じることはなかったですね。

浪人期間を経て大学に入学したダンは，そこでリセ時代の旧友と再会することになる。その旧友や，大学で出会ったフランス人教員と交流する中で，ダンは自分が「日本人っぽくなってた」ことに気づく。そして，それが「寂しかった」という。

D：なんか，久しぶりにそういうフランスの雰囲気を感じて，あー俺今までなんかすごい日本人っぽかったんだな，日本人っぽくなってたんだなっていうのを感じました。すごい日本人らしいことを言うようになったんだとか。

筆者（以下，「F」）：気付かされた？

D：はい。そうですね。

F：その気づいた時っていうのはどんな感じなの？

D：んー，なんか，寂しかったですね。

F：あー，寂しい？

D：はい。なんか，今までは多分ちゃんと両方の，フランスと日本の両方の特徴みたいなのを捉えてて。で，それが言葉に出てたのか，なんかそういう性格になってたんですよ。両方の性格みたいなのを持ってたと思うんですよ。だけど，両方の性格を持ってたんですけど，ピエール（大学のフランス人教員）とかと話した時に，なんか日本的な言葉を返したのか，そしたら「それは違うよ」みたいな反応が返ってきて。で，なんか皮肉的にピエールが，なんか言ったんですよね。で，僕は適当に，「そうですね」みたいな感じで流したら，ピエールが「いやそれ違うよ，そこはもっと言いなよ」みたいなことを言って。で，「私は本心を話さないような学生はあまり好きではない」みたいな。「これを言わなきゃダメだよ」みたいなことを言われて。で，それでなんか，俺ってすごい日本人っぽくなったんだなみたいなことを感じましたね。

今までは日仏両方の性質を備えていたはずが，学習塾とバイト先での体験を経て，知らぬ間に「日本人っぽく」なっており，そのことを「フランスの雰囲気」が強い人々とコミュニケーションする中で気づかされ，ダンは寂しくなった。

3. 1. 2. 筆者のオートエスノグラフィー1

ひきこもりになってからの筆者は，インターネットの世界に没頭していた。特に匿名の巨大掲示板サイトである「2ちゃんねる」に熱中していた。そこに参加することで，自分も世界や社会の一部として生きているような実感が得られていた。

当時の筆者は，ひどく偏った保守的思想を持っており，いわゆる「ネトウヨ」と呼ばれるような存在だった。特に中国や韓国の人々に強い嫌悪感を抱き，逆に日本人である自分の民族性には誇りを感じていた。高校にも進めず，ひきこもりになってしまった筆者は，体面や社会的な紐帯のほとんどを喪失した感覚に陥っていた。「普通の人」としての自分を大きく欠損したように感じていた。そうした中で，自身のナショナリティとしての日本人性は，唯一無条件に自分を社会と結びつけ，その一員として受け入れてもらうための要素として，アイデンティティを支える「拠り所」になっていた。掲示板上の「同胞」と他民族への敵意に基づいて連帯する中で，その愛着を先鋭化させ，ネトウヨになる。ひきこもる前まで「普通の人」だった筆者は，日本人になり，挙句はネトウヨへと堕落する。

3. 2. 物語2：「移動」への意志と指向性

3. 2. 1. ヴィアット凛のライフストーリー

ヴィアットの中で，ハーフはナショナリティとい

う面における複数性を有しているべきであるという理想がある。それはヴィアットにとって，ハーフとしての自分が思い描く，「あるべき姿」でもある。

ヴィアットは，彼女の言葉で言えば，「フランス人になりたい」という思いを持っている。「ハーフなのに日本人でしかないから」というのがその理由である。家庭では両親から日本語のみで育てられ，幼少期を過ごした環境としても日本人の子どもたちに囲まれながら育った。幼い頃に父を亡くしているが，その父とも日本語で会話していた。

ヴィアット（以下，「V」）：お父さんはフランス人なんですけど，お父さんとも全然日本語で話してたし，周りの子たちも日本人だし，その子たちと遊んでる時に特に何もなく普通に過ごしてたし。ハーフだからどうということもなく。ほんと，ただの日本人でした。

「普通」に，「ただの日本人」として幼少期を過ごした。その後も中学を卒業する頃まではハーフということについてほとんど意識することもなかったという彼女が「フランス人になりたい」と思うようになったのは，高校時代のことだという。元々高校では理系分野を選択しており，当初は大学の進学先も看護学科のある大学に行こうと考えていた。

V：大学どこ行くかっていった時に，じゃあちょっとここらでフランス語やっとくかってなった。どうせやるならちゃんとやろうって。フランス人になるぐらいの気持ちでちゃんと勉強しようって思ったのが最初ですかね。親とかとも話したのもあったんですけど，たぶんこのままもし看護学科行ったら，普通に日本で看護師になるじゃないですか。普通に行ったら。そしたら，なんかフランス語やるタイミングないなと思って。それは，なんかやだなって思ったんですよね。

「普通」に行ったらフランス語をやるタイミングがないことを「なんかやだな」と思い，ヴィアットはフランス語学科に進むことを選択する。高校時代についてさらに話を聞いていくと，ヴィアットが自分の中にあるフランスとのつながりを意識させられた最初のきっかけは，大学受験ではなく，2011年の東日本大震災に関係する出来事だった。

V：震災とかも結構大きかったような気がするんですよね。震災があった時に高1だったんですけど，フランスに避難するみたいなのがあったんですよ。なんか政府の飛行機が用意されて，とりあえず日本を出ようみたいな。大使館から連絡来るんですよ。震災があった直後に，まだ福島のことがちょっとよくわからない，どれぐらい危険かわからない状況っていう時に，なんかその日とか次の日ぐらいなんですけど，大使館から連絡があって。13日とかですかね。飛行機を出すから，無料で。凄いですよね。「それに乗りたい人はどうぞ」みたいな連絡が来て。で，その時母親が，まだほんとに福島のがどれくらい危険かわかんなかったんで，とりあえず一旦それに乗って逃げようみたいな。もしなんかあってからじゃ遅いからみたいな感じで。で，それ使ってフランス行ったんですよね，あの時。で，親戚の家行ったりとかして。元々なんか春休みの時期で元々行く予定だっていうのもあったんですけど。ちょっと早まったぐらいだったんですけど。で，なんかもうその時に，こういうこともあるからフランスで生きることも考えなきゃいけないんだよみたいな話をしたんですよ，親と。

F：そこで結構意識した？

V：そうですね。母親とかも日本人だけど，そうやってフランスの，フランス人の奥さんだからとか，あと私が一応フランス人だからっていう理由で，そういう恩恵を受けられたっていうの感じたりして。で，そういうのは自分でもちゃんとできるようにしておいた方が，せっかくそういう選択肢が自分の中で多いわけじゃないですか。もしなんかあった時にフランスに行けるかもしれないとか。そういう

ことがあるんだったら，ちゃんとそれは使える状態を保っておいた方がいいんじゃないかとかいうことを言われて。「そうだな……」みたいな。

F：結構震災とかだと身に染みるもんだよね。

V：そうですね。その時は本当にお母さんが全部やってくれたんですよ。でも，もし自分が一人だったりしたら自分でできなきゃいけないし，その時には絶対フランス語が必要になってくるので。フランスって結構，言葉ができなかったらフランス人じゃない，認められないっていうか。言葉ができることが凄い大事なんですよ。血とかより。なので，できておくべきかなっていうのもありました。

F：そこで言語としてのフランス語っていうものの重要性を感じたってこと？

V：うん。そう。言葉ができなかったらフランス人って認められないんだったら，どんなに自分がハーフだったりしても，意味ないなと思って。なんかもし，ハーフとかフランス人ってことを少しでも活かしたいって思うんだったら，必ず言語ができてなかったら，それはもう無いのと一緒だなみたいな。

東北大震災という不可抗力の出来事から影響を受け，ヴィアットの中に内在していたフランスとのつながりが呼び起こされた。

3. 2. 2. 筆者のオートエスノグラフィー2

数年が経過してもひきこもりを抜け出せず，筆者は日々「恥ずべき自分」に懊悩しながらも，長期間に渡る生活の中でそのアイデンティティは固着化しているようにも感じていた。どうにかして自分を世間に顔向けできる「普通」の状態という，「あるべき姿」に戻したいと思っても，あまりにかけ離れた姿になっている感覚があった。「遠い目標」のように思えた。「普通」に戻るためには，まずは「近い目標」を定める必要があった。

相変わらず「2ちゃんねる」に入り浸っていた筆者は，当時，掲示板内の「無職・だめ板」というページを頻繁に閲覧するようになっていた。そこは，無職の人々や，「ニート」など，「だめ人間」を自認する人々が集まる場だった。筆者は，彼らを「近い目標」として定めていた。彼らは，ひきこもりと同様に「社会的敗者」として見下されるような人々だったが，ただ一点，「家の外に出て生きている」という点でひきこもりと異なっていた。筆者にとってその一点は大きく，そして重要な差に思えた。

そうして筆者は，いずれはかつてのような「普通」の自分に戻ることを志向しながらも，まずは「家の外に出て生きる」ということに焦点を絞るようになる。「外出する」という意味でも，「家族から離れて生きる」という意味でも，「家の外に出て生きる」ということが重要なことだと考えた。しかし，実家を出て一人で生きていくためには，そのための資金・収入が必要になる。だが，他人と顔をあわせるのも会話するのも難しいような状態では，自活するのは難しい。そこで筆者は，父の財力に頼ることにした。どんな手段だろうが金銭的な問題さえ解決できれば先に進めると思っていたので，恥やプライドは捨てていた。そうして，父から家賃や生活費を工面してもらうことで，長年の実家でのひきこもり生活を終え，「家の外に出て生きる」という「近い目標」を達成することとなる。

3. 3. 物語3：家族と共に「移動」する

3. 3. 1. 塩田ニコルのライフストーリー

ヴィアットと対照的に，ニコルは日本人になりたかった。「コンプレックス」と語るほどに，自分がハーフであることに苦悩した。

ニコル（以下，「N」）：私はずっと日本人になりたいと思ってたのね。ハーフなのがコンプレックスだったから。

その原因として，ニコルが9歳の時に，父方の故郷であるスイスへ単身留学を強いられ，それが「トラウマ」的な体験となったことが影響していた。そ

の留学は両親によるバイリンガル教育の方針に基づくものであり，なおかつ彼女の意向に反するものだった。

N：えっとね，小学校3年生まで普通の公立小学校に通ってて，だから日本の教育受けて，小学校3年生の時に親が留学させたの。フランス語喋らなきゃって言って。で，そこで私は多大なるカルチャーショックを受けて。一人だよ？一人でスイス行ったの。もちろんお父さんの両親はいたよ。だから，おじいちゃんおばあちゃん。スイスに住んでる。

F：あー，だからホームステイじゃないけど，そこで。

N：そう。そこに留学して，現地の小学校に通ってた。ほんとド田舎のスイスの学校に通って，ものすごいカルチャーショックを受けて。だって日本ってなんでもあるじゃん。あっち行って，何も無いし，そのおじいちゃんおばあちゃんがすごい厳しい人だったの。多分精神的苦痛がものすごく大きくって……。その時本当に日本人になりたいと思った。たぶんその，日本の小学校が大好きだったから，その子たちと引き裂かれたっていう気持ちと，その時その先を日本で思い描いてたのね自分の中で。たぶん4年生ぐらいから部活とかあるじゃん。小学校で。あ，部活やるんだろうなとか，中学校あそこ行くんだろうなとか，それを全部思い描いてたから，私は何でこんなことになってしまったんだろうみたいな。

F：理想に対しての，なんだこれっていう。

N：そうそう。だからその時私は本当に，自分のアイデンティティを恨んだ。だから自分のフランス的なものが全部嫌になった。それこそ名前も変えたいと思ったし。なんか顔，顔も……そうだね……。黒くしたいって思ってた時もあった。

F：髪の毛を？

N：そうだね。それが1番ピークだったかな。

F：その時は本当にもう自分の中のフランス的な要素を全部取り除きたいぐらい？

N：うん。お父さんがなんでフランス人だったんだろうって，そういうレベル。

ヴィアットもダンも，それぞれに訪れた契機で自分がハーフであることと向き合って，各々の形でそれを特徴化する方向へと「移動」していた。だが，幼少期のトラウマ的体験が影響して，ニコルはそれを取り除く方向への「移動」を志向する。それでも，フランス人である父の存在は，かけがえのない家族として無視できない存在であった。

ニコルの父は，日本の大学や語学学校などでフランス語講師として長く働いていたが，ニコル曰く，「もう日本に十分住んだだろ，みたいな感じでフランスに飛んでいった」という。「十分住んだ」というほどに日本滞在歴が長かった父だが，家庭ではフランス語しか使わなかったため，ニコルが父と会話するには，フランス語を使わざるを得なかった。

F：お父さんが日本語そんなに覚えなかった，学ぼうとしなかった理由みたいなのってわかんない？

N：それは，私にフランス語を話させるため。まぁ別に，私にフランス語話すだけで，日本語勉強しない理由にはならないはずなんだけど。

F：お父さんがそう言ったの？

N：そう。子供にフランス語を話させるために，日本語は勉強しないって。理由後づけじゃないかって疑惑はあるけど（笑）

F：「俺が覚えられなかったのは，お前を育てるためなんだぞ」って？（笑）

N：多分，実際にそういう部分はあった。多分，お父さんは日本語で子供に話しかけるのは絶対に嫌だった。

F：まぁ，そうすると甘えが出るというか。この人には日本語通じるんだって思ってしまえば，バイリンガルとして，バイリンガル教育

として難しいなと。

N：あと多分，フランス人としてのアイデンティティも持って欲しかったんじゃないかな。せっかくハーフなんだったら。

F：そう考えると自分が日本社会に適応することは，ある種自分を犠牲にして子育てを，子供のバイリンガル性を選んだ？

N：そう。

F：あー，そう考えると確かに重いな。

N：それで私がフランス語話したくないなんて，言えるわけないじゃんね（笑）

ニコルは，自分がハーフであることにコンプレックスを抱えながらも，娘にハーフの「あるべき姿」を望んだ父の意向を推し量りながら，その父の思いに報いることをモチベーションの一つとして，フランス語学習に励んでいた。

3. 3. 2. 筆者のオートエスノグラフィー3

筆者も，教育熱心な両親から「あるべき姿」を提示され続けた人生だった。筆者の場合は，「いい学校に入って，いい会社に就職する」というのが「あるべき姿」だった。エリートとして生きることを求められていた。しかし，筆者は小学校から高校までのすべての受験を挫折・失敗し，エリートになるどころか，最終学歴が「中卒」のひきこもりという，「社会的敗者」のような存在になってしまっていた。幼い頃から両親によって植え付けられた，「本来そうなるはずだった自分」としての「あるべき姿」は，ひきこもりを脱した後も，二度と取り戻せない「喪失した過去」として，筆者を長く苦しめ続けた。

3. 3. 3. 物語1～3の「考察の要素」

まず，物語1で，それぞれの人生を「移動」したのはダンであり筆者である。だが，その「移動」がそれぞれに主体的なものだったのかと概観してみると，必ずしもそのように一元化できる訳ではないことがわかる。ダンと筆者は，学習塾の人々やフランス人教員やインターネット上の匿名ユーザーたちといった他者に，背中を押されたり，引きずり込まれたりした，とも言える。また，筆者に関して言えば，自ら積極的に「日本人」や「ネトウヨ」になったと考えることもできるが，他方で，「ひきこもりという抑圧された身体」とそれに伴う不安が筆者を動かした，と考えることもできるだろう。

次に，物語2では，ヴィアットも筆者も，それぞれにハーフ（あるいはフランス人）としての理想像や「無職・だめ板」の人々，あるいは「普通の人」のような，ロールモデルを思い描いている。そしてそのロールモデルは，それぞれに自分の「あるべき姿」だと思っており，その方向に向かって「移動」することを志している。お互いに，現在の自分がその「あるべき姿」に達していないということに突き動かされている。この「あるべき姿」は，いずれも他者から刷り込まれたイメージであり，この点で物語1と類似する。その上で，まず着目するのは，ヴィアットと筆者の，「移動」の目指し方の差異である。ヴィアットの場合は複数的な自己への拡張を目指しているのに対し，筆者の場合はかつての状態へ戻る，すなわち自己を回復することを目指している。これは，「原初の自己」の状態をどう評価しているか，というテーマとして見ることができる。筆者は「原初の自己」を理想として捉え，ヴィアットは「原初の自己」を未完成の状態だと考えている。そこには，筆者が「ただの日本人」として生まれ，ヴィアットがハーフとして生まれたことが影響していると考える。各々が持つ生得的な性質と，それに対する社会・世間のイメージが，それぞれの「移動」に指向性を与えている。両者ともに「あるべき自分の姿」を目指している点で共通しており，さらに，主体の意志が強く働いているようにも見える。

だが，他方でやはり注目すべきは，「「移動」する」と表現するとき，その主体はさも自らの意志に基づいて能動的に動いているかのようであっても，必ずそこに混在する他者的な「何か」が見え透けることである。物語3では，その「何か」は「像」として現れる。筆者が与えられたような「理想像」は，筆者の

ケースに限られたことではなく，現代の日本では広く敷衍された「像」であり，多くの「普通」の人々の中にも内在化させられてきたものだろう。また，ニコルが親から求められた「理想像」は，バイリンガルであることや複数のナショナリティをアイデンティティ化することだが，これもニコルの家に限った特殊なケースではなく，多くのハーフが要請されるものだと言えるだろう。

こうした「理想像」を目指す意志を直接的に子に刷り込むのは，多くの場合，やはり親なのだろう。だが，その親もまたどこからかそうした「像」を刷り込まれる側だったことを考えれば，飽くまでもその「理想的価値観」の再生産の直接的な担い手になっているだけとも言える。子が親の意志に「憑依」された存在なら，親もまた「何か」に「憑依」された存在ということである。そうして家族までもが，私的領域として公から区別されたものでなく，単に「社会の代弁者」のようなものへと（知らぬ間に）すり替わってしまう。

以上のことから，物語ごとにそれぞれの詳細・様態は異なるものの，「「移動」という営みはその主体の意志のみに依存して行われるのではなく，常に何らかの形で他者が介在している」ということが，物語1～3に共通する「考察の要素」として浮かび上がる。

3. 4. 物語4：散歩のような「移動」

3. 4. 1. ルロワ剛のライフストーリー

ここまでの物語に出てきたハーフの人々は，各々の人生の中で何らかの葛藤を経ていた。だが，ルロワは違う。彼の口からそのようなエピソードは語られなかった。彼は自分の今までの人生を「もったいないっていうか。なんかダラダラしてたって感じ」と語る。

ルロワ（以下，「L」）：基本的に俺，どこにも愛着がないんすよ。

F：なんでもいいわ，みたいな？

L：俺がコンフォタブルだったら，別になんでもよくね？みたいな。

F：例えば，「日仏ハーフだよね君たち」みたいにまとめられるのってどう？

L：どう？「日仏ハーフですよ」って思う。「そうですよ」って。

F：でも，「俺はルロワ剛だから」とか，「ハーフとかじゃないから」とか。そういうのはない？

L：ないない。たまにそういうあの，気取ってるやついるんすけど……（笑）

F：あはは（笑）そういうのじゃないと。

L：いやいや，そういうのいらないから，みたいな（笑）結構，そんな，なんかもう，あんま俺深く考えないんですよ，物事。

F：ちょっと，だからもう，結構流れが来て，その勢いに乗ってるっていう。

L：そう。安直。

「どこにも愛着がない」し，自分が「コンフォタブルだったら，別になんでも」いいと思っているのが，ルロワである。彼には執着するようなものが特にないので，流れに身を任せるような，「安直」なところがあるという。自分がハーフであることに対しても，「そうですよ」という程度の意識しか持っていないと語る。

その他の対象者と比べて，「普通」の人々と変わらないようなエピソードばかりだったので，筆者もたまりかねてハーフ特有の苦労などをステレオタイプに聞き出そうとしてしまった。だが，その問いかけに対しても，「名字が『ルロワ』だから周りの日本的な名字が羨ましかった」，「宅配便とかで聞き直されるのがめんどくさいから母親の方の（日本的な）名字を使っていた」，というエピソードを笑い話として語るのみだった。

F：今のルロワ剛が出来上がったどこかのタイミングに，これが俺の人生のタイミングだったんだなみたいな。これターニングポイントだな，みたいなのは？

L：あー……わかんない。俺のターニングポイン

ト……割とでもこんな感じっすよ，俺。変わってないかもしれない。

F：このまんまで子供の頃から大人になった？

L：そうそう。表面的には，生活的には変わってるかもしれないけど。なんて言うのかな。中身はそんなに変わってる気しない。ずっとこんな感じだと思う。

F：軸は常にそんな感じだと。

L：うん。多分ね。多分そうだと思う。変わったなぁって感じること……あーでも……あんま変わってないかな。

F：今の「あーでも」ってどんな感じなの？

L：その，中学のやつとかに会ったら，「変わったなぁ」みたいに言うけど，「そうか？」みたいな。まぁ，あるあるっすよね。久しぶりに会ったら言われる。

F：まぁそうだな。俺でもそうだから。

L：言われますよね。徐々に変化していくから気づかないんじゃないですか。ただ，急激な変化はないですよ。たぶんちょっとずつ変化してるとは思うんですけど，ちょっとずつなんで気づかないレベルで変わってるかもしれないです。

現在に至るまでのターニングポイントなどはすぐに思い浮かぶようなものもないし，自分では「そんなに変わってる気がしない」が，旧友に久しぶりに会うと変わったと言われる。これはダンが語ったリセの旧友とのエピソードに類似するものに思えるが，ルロワにとってそれは日常の中で「気づかないレベルで」変化した程度のものであり，（例えばダンの「学習塾」のような）何か特筆するエピソードと関連して語るようなものではない。

こうして「日常」を見過ごせば，ルロワは「移動」していないように見える。少なくとも今回の調査の範疇では，「まじめ」な「移動する子ども」研究の対象として期待される「ハーフらしい語り」は見当たらない。だが，「何気ない日常の移動」に視点を移し，それを異化することはできるだろう。今は本人さえ意識化できず，実態が見えないために「ふまじめ」とされる「移動」が，将来「まじめ」に文脈化されるかもしれない。その実現への足がかりとして，まずは「見えない移動」への想像を喚起することが重要だと考える。

3. 4. 2. 筆者のオートエスノグラフィー4

先述した通り，筆者がひきこもりから抜け出せたのは父の財力に頼ったからである。父に生活費を工面してもらい，一人暮らしを始めた。さらにその後に，父の事務所で職員として雇用してもらうことになる。そうして父の助けを借りて徐々に社会性や「身分」を得たからこそ，その後に大学に入学するための世間体が見繕われていった。要するに，筆者自身の認識において，筆者がひきこもりを抜け出せたのは，父の持つ力に大きく頼ったというのが実情であり，「劣等感や抑圧感を自分自身の力で乗り越えて自立的な自己を形成していく」などのような，「美談」や「モデルストーリー」は前景化しない。

加えて，筆者がひきこもりから脱する原動力となった「もう一つの動機」もモデルストーリーにそぐわない。その動機とは，「生身の異性と触れ合いたい」という，性衝動である。思春期の盛りだった筆者は，その劣情を，ポルノサイトを回遊して慰めていた。また，筆者が回帰すべき「普通」である存在の「あるべき姿」の側面の一つとして，大人への成長過程で異性との恋愛や性行為の経験を積んできた者を想起させられていた。その点においても強い劣等感を抱えていた。それを克服したいという思いもあった。恥ずかしくない，「立派な大人の男」にならなくてはいけないと，「何か」に思わされていた。いずれにしろ，性行為への強い執着は，ひきこもりを脱する動機づけ要因の一つとなっていた。

上山（2001）は，自分自身のひきこもり当事者としての人生を詳述した著書の中で，ひきこもりの挫折体験を，「社会的・経済的挫折」と「性的挫折」という2つの位相に分けて論じている（p. 151）。上山は同書の中で，ひきこもり当時の自分を回想しながら，「性

的な葛藤というのは，ひきこもり当事者の心性を強く支配し，規定していると思います。本当に，強烈な感情で，根深くこじれてしまっている」(p. 151) と分析する。

「ひきこもりの性」の物語は，一見「ふまじめ」であるため，特に「更正」を目指すような「まじめ」なひきこもり支援の現場では見過ごされがちだが，こうした「卑俗な欲望」にこそ，猥雑さも孕む現実の社会とひきこもりを結ぶ鍵があるのではないだろうか。

3. 4. 3. 物語4の「考察の要素」

本稿で使う「まじめ」･「ふまじめ」という語の用法は，「観光客」という存在について論じる東 (2017) の定義に基づく。東によると，「観光客」は「観光地に来て，住民が期待した楽しみかたとはまったく別のかたちで楽しみ，そして一方的に満足して帰る」(p. 45) という特徴を持つという。だが，そうした「ふまじめ」な観光客だからこそ，正当的な「まじめ」な文脈とそうでないと目されている「ふまじめ」な文脈とをつなげる「郵便」[4]的存在，つまり「誤配」の担い手となり，その「誤配」が単線的に固定化された文脈や関係を見知らぬ他者との交流を生み出すような複線的なものへと「つなぎかえる」(p. 168) 作用をもたらすという。そうして彼らは，分断されていた「まじめ」と「ふまじめ」の文脈を架橋してしまう。これが，東が同書で定義した「観光客の原理」である。

ルロワや筆者，あるいは上山の語りを「観光客の原理」に基づいて解釈すれば，「観光地の住民が期待した楽しみかた」，つまり他者から暗黙のうちに期待されるモデルストーリーやステレオタイプから外れた，「まったく別」の物語を各々で紡いでいるという「観光客的ふまじめさ」を共通して見出すことが可能である。そして，それが現行の「まじめ」な「移動」概念に「誤配」されることで，物語の複線化を促すと考えられる。ここから導く「考察の要素」は，「まじめ」と「ふまじめ」の境界を曖昧にすること，である。

3. 5. 物語5：既存の状態を超克する「移動」

3. 5. 1. 堀ジャメルのライフストーリー

ジャメルも，当初は「普通の日本人」だったという。家庭では日本語のみで育てられた。さらに，フランス人の父は幼い頃に亡くなってしまう。その後も日本で育った。しかし，筆者から現在の自身のアイデンティティについて問われたジャメルは，「無国籍であるっていう積極的な自覚」があると語った。ジャメルは，自己変容を遂げていた。

ジャメル（以下，「J」）：無国籍であるっていう積極的な自覚がありますね。

F：どっちがどうとかいうのではなくて？

J：はい。どちらでもないという強い感覚があります。なんか，具体的なところの1個上に，もっと普遍的な感覚っていうのがあって，僕はどっちかっていうとそこに意識が向いてる，と。日本とフランスの個々の細かい違いはあんまりどっちでもいいような感じになったっていうか。

だがそれは，自身がハーフであること，複数のナショナリティを持つことそれ自体が強く影響を与えた結果ではなく，主として大学での多方面・多分野に渡る自発的な勉学を通じて，特に言語や文化というものの総体を俯瞰的に理解するような状態に至ったからだという。自分が生得的に持っている，あるいは日本とフランスの両国の間を「移動」した経験から得てきたような日本・フランス・ハーフにまつわる性質は，そうした学びの総体の一部分でしかなく，あえて特筆するような「主要なテーマではない」とも語る。

4 「郵便」とは，ジャック・デリダが用いた概念であり，「誤配すなわち配達の失敗や予期しないコミュニケーションの可能性を多く含む状態」(東，2017，p. 158) という意味で使われている。この「誤配」が，「新たな理解やコミュニケーションにつながったりする」として，東は『観光客の哲学』における鍵概念の一つとして取り上げている。

J：　自分がその主要なテーマにはなってないってことです。あくまで，文化というものに興味があって，それを理解したいだけで。その結果獲得した視点で，自分を見た場合には，ある性質が見えてきたりするってだけで。

F：　いくつもあるケースの一つとして自分がある？

J：　そうですね。自分が主要なテーマではないです。

ジャメルは「無国籍」である自分の認識や感覚を，周囲の「普通」な人々と比較して，以下のように語っている。

J：　なんていうか，その異質なものがそこにあること自体を理解できない場合が多いと思っていて。わかりやすいかわからないですけど，例えで言うと，平面を歩いていて，実はこの下や上にも空間があるってことが見えないような感じで。

F：　世界がそこで完結してる？

J：　なんかその，全く違う方向性ってものを，そう簡単に見えるもんじゃないらしいってことを，僕は周りを見てて感じたことで。それに，決定的に異質な文化の見方っていうものに直面していながら，結構認識できていない人が多い。それと自分を比べた時に，比較的それが見えているような気がしていて。

「具体的なところの1個上」にある「普遍的な感覚」というものは，現在自分が立っている世界の「下や上にも空間があるってこと」を認識することだとジャメルは解説する。ジャメルは，勉学を通じて既存の視野を多方向へと広げていくことで，生得的な，あるいはそれに基づいたステレオタイプなアイデンティティを超えていった。

3. 5. 2. 筆者のオートエスノグラフィー5

大学に入ってからの筆者は，ひきこもりとしての過去を周囲に隠し続けていた。それは「恥ずかしいもの」で「無意味なもの」でしかないと思っていたからである。だが，ひきこもりとして生きた自分をいつか意味づけたいという想いも抱え続けていた。

周囲に対する他者意識が強かった筆者は，他者接触というテーマに関心を寄せて学びを進めていた。そうした中で，矢野（2000）に影響を受ける。矢野は，ルイ・デュモンが「世俗外個人」と呼んだような，既存の社会における全体論（ホーリズム）を脱構築し，個人主義を誕生させた存在について論じている（pp. 49 - 50）。「世俗外個人」とは，例えばソクラテスのように，「ポリスのうちに住まいながら，共同体の言語ゲームにしたがわない他者」(p. 71)[5]として，「世俗内の大衆」を闊達する存在である。

筆者はこの「世俗外個人」という概念に，ひきこもり当時の自分の姿を重ね合わせることができた。だが，本稿で当時のことを内省するうちに，ひきこもりだった期間，本当に筆者は「世俗外」にいたのか自問するようになった。当時の筆者の眼前には，インターネットという「窓口」を通じ，常に多くの「世俗内」の人々がいた。そして，その場は，リアルタイムの「世俗内」の様子を即座に反映した膨大な情報に満ちていた。さらに，「世俗内」性を脱構築できたはずのひきこもりとしての自分の存在意義を長らく自身で否定し続けていたこともあり，「世俗外個人」としてのアイデンティティは確立されていないように思えた。かといって，もう「世俗内の大衆」へと完全に回帰することも叶わない。そうして，どっちつかずの，異物同士を継ぎ接ぎした「キメラ」[6]になってしまった。しかし，それは「世俗内」性と「世俗外」性が複合する存在になったということであり，その点で，現在では自分のことを「世俗間ハーフ」として意味づけることができる。

5　矢野は柄谷行人の『探求』を参照している。

6　高江（2015）は，キメラのような存在は「漠然とした不気味さを私たちにもたらす」(p. 50) と述べている。また，「種間の境界を越えるキメラ的存在は，人間という種のアイデンティティを脅かすものとして捉えられる」(p. 51) とも述べている。

3. 5. 3. 物語5の「考察の要素」

ジャメルも筆者も，勉学を通じて既存のアイデンティティを超克した。「自己の生成変化」を哲学する千葉（2017）は勉強という行為を，「これまでの自分の破壊である」(p. 216) と位置づけ，そうした自己変容を促すほどの体験をもたらす勉強を，「ラディカル・ラーニング」と定義する。ラディカル・ラーニングとは，「ある環境に癒着していたこれまでの自分を，玩具的な言語使用の意識化によって自己破壊し，可能性の空間へと身を開くこと」(p. 217) である。「玩具的な言語使用の意識化」とは，「特定の用法から解放され，別の用法を与え直す可能性に開かれた言語のあり方」(p. 216) を認識することである。そうして，それまでの自分を規定していたものとは異なる環境やコード（＝新しい言語ゲーム）を見つけることによって，そこへ「移動」することができるようになる。

勉強によって得た新たな言語の使い方を用いて，筆者が自分を「ひきこもり（経験者）」から「世俗間ハーフ」へと名づけ直したことや，ジャメルが自身を「無国籍」という言葉で自己を定義したことは，千葉が論じていることの実例と言えるだろう。それはつまり，勉強を通じて複数の言語ゲームの間を「移動」したということである。重要なこととして，そうした「移動」が起きる時には，（例えば「国境を越える」といったような）実際的，あるいは身体的な意味での「移動」は行われていない点に着目すべきだろう。たとえ身体が一つの場所・地点に固定されていたとしても，「移動」は起きうるのである。この「非身体的（概念的）な移動」を，物語5における「考察の要素」とする。

4. 結論

4. 1. 研究課題の考察1：複言語・複文化性の原点回帰

結論として，まず複言語・複文化性の原点回帰を行う。前提として，本来の複言語・複文化性の定義においては，言語という言葉の意味を日本語やフランス語のような「文法や辞書などを備えた立派な言語」（西山，2011，p. 3）だけでなく，「言語変種」という概念を用いることで，その意味内容を拡張して捉えていることを踏まえる。

言語変種が持つ機能として，コミュニケーション上の機能以外に，「社会集団の連帯をになう要素」（欧州評議会言語政策局，2007/2016，p. 95）があるとされ，「私たちは，用いる言語変種ごとに集団に帰属するものとしてカテゴライズされる」(p. 95) という。また，「言語変種は，集団のアイデンティティやその特質を構築する素材」(p. 95) であると位置づけられている。さらに，「社会においては，歴史的，社会的な理由で他の言語変種よりも重要な機能をになうようになった言語変種がある」(p. 96) とされ，「言語変種間でのこうした地位の不平等性は，対等でない法的地位や，見下すような表象といった形で表現される」(p. 96) という。つまり，「立派な言語」と「立派ではない言語」，あるいは「まじめな言語」と「ふまじめな言語」のように差別化が行われ，そこに一方向的なヒエラルキー構造が作り出されているのである。

物語4の「考察の要素」をここで用いる。東が指摘しているような「二層構造」化が，国際性のみに依拠した複言語・複文化能力観の周辺にも存在していることがわかる。国際性という文脈のみに基づき，国際的ならば「まじめ」な複言語・複文化性，そうでなければ「ふまじめ」という分断が行われる。その境界を曖昧にするためには，国際性に対置するような，そして相互包摂的関係を構築しうるような文脈を打ち立てる必要がある。

筆者はそのために，「筆者の複言語・複文化性」を文脈化する。筆者は，「普通の人」から「ひきこもり」になり，さらに「ネトウヨ」にもなった後に，そこから脱し，「大学生・大学院生」を経て，「世俗間ハーフ」になった。そのそれぞれのタームにおいて，筆者は「ネイティブとして「言語（変種）」や「文化」を

獲得してきた」と言えるだろう。例えば，筆者が上山（2001）の「言語」を理解できるのは，筆者が「ひきこもり語」を習得しているからである。また，ヘイトスピーチを行うネトウヨを，交流不可能な「人でなし」として切り捨てずに，拠り所のない寂しさや孤独を抱えた，かつての自分と同じ弱い人間同士として対話することもできる。それは，筆者が「ネトウヨ語」を理解するからである。それでいて今では，深い勉強で得た教養に基づいた，学問的な文法に則った，「まじめ」な「大学院生語」も扱えるようになってきた。そんな「世俗間ハーフ」性を持つ筆者だからこそ，本稿のような，「まじめかつふまじめな論文」を書くことができる。

以上が，筆者が持つ複言語・複文化能力の表象である。この文脈を，国家間における複数性に基づく「国際性」と対置する文脈として，世俗間の複数性という特徴に基づいて，「（世）俗際性」と名づける。この二つの文脈を並列させることで，ひとまず，ハーフとひきこもりとの間に関しては相互包摂的関係を構築することが可能になる。単線化していた複言語・複文化の物語を，本来の複線的な物語へと回復することができる。

4. 2. 研究課題の考察2：「移動」概念の再定義

次に，「移動」概念の再定義である。バンヴェニスト（1966/1983）は，動詞における能動でも受動でもない「態」としての，「中動態」について論じており，「「能動」という項は，「中動」に対立された時には，「受動」に対立された時と同じ意味を持ち得ない」（p. 166）ことを指摘する。中動態と対立した場合の能動態の動詞の主語たる者には，その動作の行為の主体としての十全性が失われ，その代わりに，その行為において主語たる者がどれだけ自由であるかが問われることになるという。

國分（2017）は，バンヴェニストの同論考を参照しながら，中動態的な行為における意志の在り方の問題を論じている。國分は，バールーフ・デ・スピノザが「神即自然」という概念に基づいて，「神こそが唯一存在している「実体Substantia」であり，これがさまざまな仕方で「変状」することによって諸々の個物が現れる」（p. 239）と論じていることを引用し，意志を「神の変状」として捉え，その不在性，不十分性を論じる。つまり，人間の意志は，主体が常に絶対的に支配できているようなものではなく，「神」のように，主体の操作が及ばないものの影響を受けるような，矛盾を抱えた概念なのである。

この中動態的観点から「「移動」する」という動詞の意味を捉え直す。要点は，「中動態の世界」には，本人の意志に拠らぬ「移動」，自由が制限された「移動」，当事者が無自覚の「移動」などが存在しうることだ。ここで，物語1～3の「考察の要素」を用いる。ダンもヴィアットもニコルも筆者も，「フランス人教員」や「震災」や「家族」，あるいは「あるべき姿」や「理想像」のような，外的要因に導かれるように「移動」していた。こうした「他者が介在する移動」は，国際性の文脈のみに落とし込めるものではない。それぞれの「移動」に異なる文脈を構築していく必要があることが理解されるだろう。

この中動態の観点に基づけば，物語4における「無自覚の移動」，物語5の「非身体的移動」もまた，言うなれば「移動変種」の一つとして見立てることが可能になる。主体の意志の有無とは無関係に，あるいは身体が固定されていても「移動」は起きうる。いや，たとえ動くまいとしていても，誰もが抗いがたく「移動」してしまうのである。「移動」を経験せずに人生を終えられる人はいない。「移動」は万人の日常の中に，知らぬ間に偏在しているのである。だが人間は，たとえ自分自身が当事者になっていようとも，そうした「移動」をしばしば認識できず，したがって語り出すこともできない。何故ならば，「移動」は，十全的に主体の意志に基づく動作ではなく，外的要因としての「不可避な何か」の影響を受けて行われている営みでもあるからである。万人は，常に，主体的意志があろうがなかろうが，「移動」している。そうした点において，「移動」もまた複言語・

複文化性と同様に，普遍的概念として再定義することができるだろう。

4. 3. まとめ：「移動する子ども」研究は「移動」できる

「移動する子ども」研究の主著者である川上郁雄は，細川（2011）に収蔵されている講演の記録おいて，会場からの「「移動する子ども」のアイデンティティ形成の問題は，ヨーロッパでも同じ問題を抱えており，研究もされているかと思います。実際にヨーロッパ（そのほかの世界含む）と比較して，日本に固有な問題はあるのでしょうか」という問いに応答する形で，「欧州で私が訪問した国々では，国籍と異なる次元で，複言語，複文化のことが話題になる点があり，印象的でした」（川上，2011，p. 33）と述べており，本研究が指摘する問題の一端については認識しているのではないかと考えられる。

「移動する子ども」研究は，多岐に渡る「移動」の文脈を開拓しつつ，より複線的な研究内容へと発展可能だと筆者は考えている。本研究ではその例として，（筆者の個別のケーススタディに過ぎないが）ひきこもりの「移動」性を示した。今後さらに未知の「移動」の様態が明らかにされることが期待される。現代の子どもは，目に見える形の能動的な「移動」を様々な他者から暗に要請され，抑圧を抱えていると考える。その反動の現れの一つがひきこもりではないだろうか。単線的に人生の行き先を限定する「移動への抑圧」が，複数の道を示す新たな「移動」概念により拡張的に解消されることを展望する。

文献

浅倉拓也（2017年1月3日）．日本人って何だろう（我々はどこから来て，どこへ向かうのか2）『朝日新聞』朝刊東京版，1面.

東浩紀（2017）．『ゲンロン0 ── 観光客の哲学』genron.

井本由紀（2013）．オートエスノグラフィー ── 調査者が自己を調査する．藤田結子，北村文（編）『現代エスノグラフィー ── 新しいフィールドワークの理論と実践』（pp. 104 - 111）新潮社.

上山和樹（2001）．『「ひきこもり」だった僕から』講談社.

欧州評議会言語政策局（2016）．山本冴里（訳）『言語の多様性から複言語教育へ ── ヨーロッパ言語教育政策策定ガイド』くろしお出版.（Council of Europe. (2007). *From linguistic diversity to plurilingual education: Guide for the development of language education policies in Europe* [Main version]. Strasbourg: Council of Europe.）

岡原正幸（1995）．家族と感情の自伝 ── 喘息児としての「私」．井上眞理子，大村英昭（編）『ファミリズムの再発見』（pp. 60 - 92）世界思想社.

岡村兵衛（2016）．「ハーフ」をめぐる言説 ── 研究者や支援者の著述を中心に．川島浩平，竹沢泰子（編）『人種神話を解体する 3 ── 「血」の政治学を越えて』（pp. 3 - 34）東京大学出版会.

川上郁雄（2010）．「移動する子どもたち」のことばの教育学とは何か．『ジャーナル「移動する子どもたち」 ── ことばの教育を創発する』1，1 - 21．http://hdl.handle.net/2065/00062898

川上郁雄（2011）．「移動する子ども」からことばとアイデンティティを考える．細川英雄（編）『言語教育とアイデンティティ ── ことばの教育実践とその可能性』（pp. 28 - 33）春風社.

岸政彦（2015）．鉤括弧を外すこと ── ポスト構築主義社会学の方法論のために（特集：いまなぜプラグマティズムか）『現代思想』43(11)，188 - 207.

國分功一郎（2017）．『中動態の世界 ── 意志と責任の考古学』医学書院.

コスト，D.，ムーア，D.，ザラト，G.（2011）．姫田麻利子（訳）複言語・複文化能力とは何か『大東文化大学紀要』49，249 - 268.（Coste, D.,

Moore, D., & Zarate, G. (1997). *Compétence plurilingue et pluriculturelle: Vers un Cadre Européen Commun de référence pour lenseignement et l'apprentissage des langues vivantes: Etudes préparatoires*. Strasbourg: Éditions du Conseil de l'Europe.)

斎藤環（1998）.『社会的ひきこもり ── 終わらない思春期』PHP研究所.

桜井厚，石川良子（編）（2015）.『ライフストーリー研究に何ができるか ── 対話的構築主義の批判的継承』新潮社.

清水高志（2017）.『実在への殺到』水声社.

ストラザーン，M.（2015）. 大杉高司，浜田明範，田口陽子，丹羽充，里見龍樹（訳）『部分的つながり』水声社.（Strathern, M. (2004). *Partial connections* (updated Ed.). Altamira Press.）

牲川波都季（2013）. 誰が複言語・複文化能力をもつのか『言語文化教育研究』11，134-149. http://hdl.handle.net/2065/38977

関水徹平（2016）.『「ひきこもり」経験の社会学』左右社.

高江可奈子（2015）. キメラ的存在を巡る議論 ── 「種」を規定する性のあり方の倫理的位置づけを考える『現代生命哲学研究』4，50-61.

千葉雅也（2017）.『勉強の哲学 ── 来たるべきバカのために』文藝春秋.

トッド，E.（2016）. 堀茂樹（訳）『問題は英国ではない，EUなのだ ── 21世紀の新・国家論』文藝春秋.

灘光洋子，浅井亜紀子，小柳志津（2014）. 質的研究方法について考える ── グラウンデッド・セオリー・アプローチ，ナラティブ分析，アクションリサーチを中心として『異文化コミュニケーション論集（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科）』12，67 - 84.

西山教行（2011）. 外国語教育と複言語主義『外国語教育フォーラム（金沢大学外国語教育研究センター）』5，3 - 13.

バンヴェニスト，E.（1983）. 岸本通夫（監訳）『一般言語学の諸問題』みすず書房.（Benveniste, E.（1966）. *Problèmes de linguistique générale*. Paris: Gallimard.）

細川英雄（編）（2011）.『言語教育とアイデンティティ ── ことばの教育実践とその可能性』春風社.

矢野智司（2000）.『自己変容という物語 ── 生成・贈与・教育』金子書房.

Council of Europe.（2001）. *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment*. Strasbourg: Cambridge University Press.

Denzin, N. K.（2006）. Analytic autoethnography, or déjà vu all over again. *Journal of Contemporary Ethnography, 25*(4), 419 - 428.

Fisher, W. R.（1985）. The narrative paradigm: An elaboration. *Communication Monographs, 52,* 347 - 367.

Hayano, D. M.（1979）. *Auto-ethnography: Paradigms, problems, and prospects*. Human Organization, 38, 113 - 120.

Riessman, C. K.（2008）. *Narrative methods for the human sciences*. Thousand Oaks, CA: Sage.

http://alce.jp/journal/ vol. 17 (2019) pp. 339 - 359 ISSN : 2188-9600

Studies of Language and Cultural Education SLCE 言語文化教育研究 発行・編集 言語文化教育研究学会 ALCE Association for Language and Cultural Education

Article

Partial connections between *Hāfu* and *Hikikomori*

Returning to the origin of the plurilinguality and the pluriculturality and redefining the concept of "moving"

FUJITANI, Hiroki*

Graduate School of Media and Governance, Keio University, Kanagawa, Japan

Abstract

According to Hiroki Azuma's *Genron 0: A philosophy of the tourist* (2017), the modern world has become a "two-layered structure" like a dichotomy in various aspects such as nationalism and globalism. The present study aims to at bring back the story of plurilingualism/pluriculturalism, which is now a factor that creates a "two-layered structure" with being simplified into only the context of internationality, to its original context. The present study criticizes the research of "the children crossing borders" as an example of a simplified plurilanguage/pluricultural story. And focusing on the two-terms confrontation of "the children crossing borders" and "the children non-crossing borders" that be implied by the research of "the children crossing borders," the author tries to create an intermediate context in between these two. By doing so, the author hopes to redefine the concept of "moving" mentioned in the research of "the children crossing borders" in an extended way. As a narrative approach for these purposes, the present study conducts on a life story survey of people called "*Hāfu*" who was born between a Japanese parent and a French parent. In addition, the author of the present study writes my own "*Hikikomori*" experience as auto-ethnography and crosses it with the stories of people of "*Hāfu.*" Then, by creating a context of "partial connections" between "*Hāfu*" (the children crossing borders) and "*Hikikomori*" (the children non-crossing borders), the story of plurilingualism and pluriculturalism is revived to be as the multi-line story.

Copyright © 2019 by Association for Language and Cultural Education

Keywords: Children crossing borders, identity, *Tojisha-Kenkyu*, life story, auto-ethnography

* *E-mail:* fujitani@sfc.keio.ac.jp